

## 仏教思想と共生社会

水谷 幸正

### 一 二十世紀の概略的総括

あと二年で二十世紀が終ろうとしている。この世紀がどのような時代であったか、という総括がすでに多くの識者たちによって提言されている。提言者の思想信条や立場の相異によって、それらの意見はさまざまであり、必ずしも一致していない。しかし、おおよその統一的な見解を二、三挙げることができる。

その一つは、数世紀にわたる物質文明、自然科学の発達によってもたらされた「もの」中心から、「こころ」の重要性に気づいてきた、ということである。科学といえば主として自然科学を意味しているように、十九世紀から二十世紀にかけては自然科学万能の時代であり、科学技術の進歩は実にめざましいものがあつた。宇宙の開発、原子力の利用、遺伝子工学、情報科学などについては、今後なお飛躍的に進展することであろう。ところで、もともと科学は人間に幸福をもたらすものでなければならぬ。人類の平和を破壊し人びとを不幸にするようなもの、たとえば核兵器、あるいはクローン人間などについての科学の限界を認めねばならない。かくして、科学をコントロールする人間性、いいかえれば人間の豊かな「こころ」が科学以上に大切である、ということが強く訴えられるよ

うになった。「もの」が栄えて「こころ」が減びるのではないかという危機感が、二十世紀後半とくに顕著になってきた。

つぎにその一つは、西洋思想のゆきづまりから東洋思想が見直されてきた、ということである。かの有名なドイツの文化哲学者オスワルド・シュペングラーの「西欧の没落」、イギリスの歴史哲学者アーノルド・トインビーの「第三文明論」などはその代表的な見解の一つである。自然科学にかぎらず、学問一般の先進国が西洋であり、哲学といえばギリシヤ以来の伝統をもつ西洋哲学のことであつた。日本では、明治時代のはじめに西洋哲学を受容して以来、学者の間では西洋哲学を純粹哲学（略して純哲）と呼んで、中国哲学や印度哲学と区別していた。いまでもそのような用語を使う古い学者もいる。西洋が純、東洋が準であるというのが二十世紀前半の哲学界の傾向であつた。比較哲学、比較思想研究の成果もあつて、東洋哲学、とくに仏教思想があらためて注目されるようになったのが二十世紀後半である。かつては、学問や文化の中心であることを自負していた欧米人にとって、東洋の思想や宗教は異文化の研究対象としてフィロロジカルに研究されていたのであつて、主体的（自己の思想ないし信仰の形成）な研究は少なかつた。いまや二十一世紀の指導理念を仏教に求める潮流がだんだんと大きくなってきている。

さらにまたその一つは、学問研究の専門化、細分化、そして総合化ということである。欧米においては、より早い時期から学問領域が細分化されてきたことであろうが、日本ではこのことも二十世紀後半からとくに著しくなつてきている。自然科学は科学を代表するありかたからして、社会科学は複雑な社会機構や人間関係を説明する現代科学として、この両者は細分化されて当然であつたが、守旧的傾向の強い人文科学の分野でも細分化されており、新しい専門分野がずいぶん開発されている。専門化のありかたの反省にたつて、細分化された学問領域の総合化もおこなわれており、総合的研究が盛行していった。また学際領域の研究が促進され注目されるようになって

きた。ここ十数年前から、ものごとを総括的、全体的にみるホリスティックな学問が急速に進展している。ホリスティック医学、ホリスティック経営学、ホリスティック人間学などというのがそれである。このことについては後で述べる。

このほか、二十世紀の時代的特徴として、大衆社会、情報産業社会、東西対立から南北対立、基本的人権の確立、覇権主義の終焉、社会主義国家の成立と衰弱など、いろいろなことが指摘されているが、それらについては省略して、とりあえず以上の三つのことにまとめておく。

## 二 二十一世紀をめざす仏教

右に述べたような二十世紀において、仏教ないし仏教界（教団、文化・学問、社会活動など）はどうであったか。いちがいに言えない。各国の仏教界はそれぞれ事情を異にしているし、ひと口に仏教界といっても、その分野はあまりにも広い。日本だけとりあげても単純ではないが、日本の場合後半に大きく二分してもよいだろう。前半のことはともかくとして、ここ五十年来の仏教のありかたを大ざっぱにでも真剣に反省する必要がある。外国のことはよく分らないので、日本を中心に考えてゆきたい。

そもそも日本仏教の特徴は、国家仏教、生活仏教、学問仏教、宗派仏教である、とみなすことができる。<sup>②</sup>

鎮護国家をめざすという大義名分のもとに、いわば支配階級に奉仕する仏教のありかたが韓国からの公伝以来日本仏教展開の一つの原動力になっていた。鎌倉時代以降、庶民仏教が大きな流れになっていったとはいえず、権力者に利用されていた側面は否定できない、明治時代以後の絶対主義国家において国家神道が大きな役割りを果たして

いたとはいえ、仏教教団も国家の趨勢にそれなりに順応していた。その典型が戦争協力である。不殺生を標榜し、人類の福祉と平和を願う仏教者として、まず、この戦争協力への懺悔なくして日本仏教の国際化はありえない、とわたくしはかねがね主張してきた。しかしそれにしても、戦後五十年間（二十世紀後半）においての国家と日本仏教のありようが著るしく方向を転換していることを認めてもよいとおもう。

生活仏教とは日常生活の中にとけこみ定着していった慣習、風俗、行事などのことである。国家仏教に対比して言うならば庶民仏教ということになろうかとおもう。それはあまりにも多方面に展開していて多種多様であるが、祖先崇拝の葬祭仏教、除災招福の祈禱仏教、年中行事、文学、音楽、芸術芸能などが主たるものであろう。永い伝統の中で日本人の心に滲み込んでいったものが生活化されたものであるから一朝一夕で変わるものではない。しかし、科学技術による生活様式の向上、社会状況の変化（たとえば家族構成、学校教育など）による生活意識の合理化などによって、生活仏教の内容が徐々に変わっている（いまそれを具体的に指摘する余裕はないが）にしても、国家仏教のありかたほど変わったとはいえない。仏教者（僧侶）に対してプラス評価よりもマイナス評価が多いということも以前と同様である。戦前の僧侶に比べて戦後の僧侶の質が低下したとも言われているが、このことは僧侶のみでなく、政治家、経済人、学者、教育者などあらゆる職業人にも該当する。それにしても、私自身は当然のこと、僧侶はとくに厳しく自己反省せねばならない。

ところで、このような生活仏教のありようを形づくってきたインビジュアルな日本人の心、より具体的に言えば、もの見かた考えかたが仏教に根ざしていることは多くの識者の指摘するところでもある。東アジアのシャーマニズム、日本人固有の信仰心、古神道、儒教などさまざまな宗教心も指摘されているが、仏教伝来以後の仏教精神、仏教思想が日本人の心を培ってきたことは間違いない。日本だけではない。日本仏教の兄ともいべき韓国の人び

との心やその文化を養ってきたのも仏教である。中国もまた然り。東アジアの人びとのものの考えかたや文化は仏教をぬきにして論ずることはできない。しかもさきに一言したように、二十世紀は西欧文明、精神にかわるものとして東洋が見なおされた時代であった。なかんづく仏教思想が注目を浴びているのである。

二十世紀の移り変りの中において仏教の歩みを省察しながら、これからの仏教はどうあるべきかということ課題として仏教者は自己を常に問い続けねばならない。この問題意識が未来へ向かつての仏教発展の原動力になる。

この問いに対する解答は一様でない。さまざまな面から多くの答案が用意されることであろう。時代相が多種多様であり仏教もまた多種多様であるからである。そのことを承知の上で、現代社会における仏教の存在意義を再確認しながら、かつてわたくしは抽象論ではなく、仏教者の具体的な実践方向を提示した「浄仏国土 成就衆生」が仏教の社会的展開のプリンシプル（行動基準、目標）である、言いかえれば、仏教による人間教育と社会福祉こそ二十一世紀を拓く仏教思想の鍵であることを論じた。<sup>③</sup> 浄仏国土成就衆生という仏教教育、仏教福祉による社会を実現するための思想的根拠が「共生」なのである。仏教がめざす二十一世紀の社会は共生社会である、という期待感をもこめて、「共生」についてあらためて考察を加えることにする。

### 三 「共生」の用語

ここ数十年來、日本では「共生」が、国際や情報と同じように流行話になっている。とくに最近雑誌・新聞の類で「共生」という言葉を見ない日はないと言ってもよいぐらいである。本論文の冒頭で述べたような二十世紀の現状をふまえて、二十一世紀を展望し新世紀を拓く指導理念として「共生」が訴えられているのである。政治、経

済、経営、社会、人間、自然、医療、技術、建築、都市計画等々、あらゆる分野でいわば最先端の思想として用いられており、日常の身近な用語としても多用されている。三年以上前になるが、「共生」の語をタイトルにした日本の書籍が四十数冊になる、と発表されている。<sup>4)</sup>乱用済みであるときえいつてよい。

では、日本語としての「共生」の意味が現在どのように説明されているのか。てっとりばやく身近な五つの国語辞典を見てみる。

(1) 『広辞苑』（岩波書店、一九九五年刊）「共生・共棲」①ともに所を用じくして生活すること。②異種の生物が行動的・生理的な結びつきをもち、一所に生活している状態。共利共生と片利共生とに分けられる。寄生も共生の一形態とすることがある。」

(2) 『日本語辞典』（講談社、一九九五年刊）

(3) 『国語大辞典』（学研、一九七八年刊）

(4) 『国語辞典』（集英社、一九九三年刊）

これら三つの辞典は、『広辞苑』とほぼ同じ説明なので省略する。

(5) 『大辞林』（三省堂、一九九五年刊）

『広辞苑』と同じ説明をしたあとに、「子と母親の相互依存の状況」と意味づけており、さらに「共生感」の語彙を収録し「人間が自分以外の事物にも共通の生命があるとみなす心性。呪術や宗教の発生する基盤にあると考えられる。共生観念。」と説明する。

五つの辞典はすべて、共生を共棲と同義に収録し、同じ所で生活していることを意味しているが、(5) 『大辞林』のみは、本論文がこれから論じようとする方向へ一歩進んだ意味を与えている。各学問分野における辞典類を詳し

く調べていないが、ほぼ「共棲」の概念、いいかえれば生物学用語のSymbiosisの訳語として用いているのが日本における「共生」解釈の現状であるといつてよい。

結論をさきに言う。「共生」は仏教的なものの考えかた見かたである。翻訳語ではない。もともと日本語である。では仏教辞典ではどうなのか。どの辞典にもこの語は収録されていない。<sup>5)</sup>ただ『浄土宗大辞典』(山喜房仏書林、一九七四年刊)にのみ「共生会」の項目があり、共生会運動の提唱者椎尾弁匠師が説く「共生」について解説している。<sup>6)</sup>現代用語としての「共生」の語源は一九二二年にはじまったこの椎尾弁匠師の用語にあるといつてよい。<sup>7)</sup>日本ではいまやあらゆる分野で多用され、新世紀を導くキーワードとさえ言われている。「共生」は、仏教現代化運動展開のキーワードとして七五年前にできた用語なのである。<sup>8)</sup>

#### 四 「共生」の主張

椎尾弁匠師は一九二二年共生会を結成し共生運動を発足させた。第一次世界大戦後であった。物質経済が豊かになつた反面、社会主義、労働争議、農村小作争議などが頻発、さらには関東大震災が発生するなど、社会不安、思想動揺が激しくなつた。自然破壊、環境汚染、国際的な地域紛争、大量の難民等々、地球的規模でのいまの社会的混乱と様相を異にしているが、人心の不安という面では似かよっている。このような社会状況の中で、仏教の本義にもとづく社会化運動が共生会活動であつた。椎尾弁匠師の人徳識見、強い指導力もさることながら、時代の要求がこの運動を急激に発展させ日本全国に拡まつていった。

「共生の主張」として

- 一、私共は同信協力を通じて成就衆生の大道をたどらんとするもの、国境も民族もえらぶところではありません。
  - 一、私共は同事の聖訓を奉じて分担協調の二辺を完うせんとするもの、貧富も男女も隔つところではありません。
  - 一、私共は共存の実義を体して共生浄土の成就を念ずるもの、利鈍も強弱もあい携うる考えです。
  - 一、私共は無量の光寿に授せられて智目行足の精進を心とするもの、智愚も能も帰一するつもりです。
  - 一、私共は如來の靈徳に化せられて偏狹・愚癡・怠慢・卑弊の打破さるることを希念してやみません。
- の五項目を趣旨所信にしている。<sup>(9)</sup>

また、「共生要目十綱」として

- 一、共生同人は共存共栄の立場より、進んで共生眞実の大道に生きるものとす。
  - 二、共生同人は天地一切の諸縁和合を実相とし生命とし、これと共生するものとす。
  - 三、共生同人は一切の迷信を打破し、覚醒正態の宗教に生き、創造進化を旨とす。
  - 四、共生同人は団体の尊嚴を明にし、国民信念に生きて万邦協和を全うせんとす。
  - 五、共生同人は研究考察を深くし、改善実行をあげ「喜び働く」をモットーとす。
  - 六、共生同人は業務の尊重充実をもって生命とし、死事死物なきを期するものとす。
  - 七、共生同人は偏見・誤りを脱し、全体の作業、有信の教育を主張するものとす。
  - 八、共生同人は政治の中心を人生進歩に描き、同胞生活と人類共生の実現を期するものとす。
  - 九、共生同人は経済すなわち信仰の立場に立つて産業の発達、経済の充実を計るものとす。
  - 十、共生同人は淨仏国土成就衆生をもって使命とし本願として主張するものとす。
- の十項目を目標に掲げている。<sup>(10)</sup>



『共生講壇』『共生基調』には、実に詳しく「共生」の思想、そしてその社会生活上における具体的実践について述べている。たとえば「真生正命」の「協同共生」の項のはじめに「仏教は無我の根底に立ち縁起の実相を主張いたします。すべてに個体の孤立を認めませぬ。一切は縁によってできあがってゆくのであります。誰人といえども一個人として独存すべきものではありません。この肉体が衆縁の合成であるように、その存続もまた衆縁の力であります。縁に遠近の差別こそあれ、全法界をあげて、一切が相依相関でないものはありません。すべては協同であり共生であり、社会のおかげであります。……」と述べており、また「真実共生世界」の(1)同じ寿、同じ光のなかに」の項のおわりに「共生というものが単にそれから見た共生でなくして、なかの方からの共生を見出すことができる。なかの方から見出すとはや共生が共でもない。ただ生きるということになってしまふ。同じ唯一の弥陀の力が一切の上に働いているという時に、何も共に生きるということもないのである。共に生きるということはわれわれの差別の觀念があります上から、彼方から弥陀の光を眺め、此方から弥陀の力を認めまするのを、共に生きる」と称するのであつて、共にするといふ分ちはないのであります。そうしてこの上に始めて本当の社会の生命ができるのであります。」と述べているように、仏教の根本思想から展開し、浄土教の宗教心にすわりをおくのが「共生」である。

つまり、この共生運動の基調は仏教の根本思想といわれる「縁起」なのである。「縁起」を「共生」と言いかえたといつてもよいであろう。では「共生」の用語の根柢はなにか。浄土教の大成者、中国唐の善導大師の『往生礼讚』に繰り返し讃歌する「願わくは諸の衆生と共に安楽国に往生せん」に依つてゐる。

衆生と共に安楽国に往生する、という浄土教の根本義に立脚し、日常生活の実践をとおして、現世における真実生命顕現、同胞人類愛、同事協調の人生をめざすことが「共生」であつた。未来浄土を指向しつつ現実の業務生活

の上に人間として真実に生きる共生生活を具現しようとしたのである。現実生きる人びとに活きた仏教を展開せしめた功績は大である。

## 五 仏教の根本思想——「いのち」の哲学——

二五〇〇年の歴史を通じて一貫して変らない仏教精神が、現代社会の新たな動向を指導する理念にならなければならぬとするならば、その内容はいかなるものであるか、そしてそれを現代的にどのように表現すべきであるか。このことについての議論は多く、さまざまであるが、私見を結論的に一言でいえば、仏教の根本思想といわれる「縁起」思想を「いのち」の哲学として提示したのである。

おもうに、ギリシャ哲学から発展してきた西欧哲学はまことにすばらしい思想体系であるが、しいて言えば「いのち」の思想が不充分であった、といわれている。それに比べて仏教思想には、もちろん論理学や認識論があるにしても、「いのち」の哲学が仏教思想の中枢であった、といつても言いすぎではなからう。「まず言葉ありき」というヨーロッパ思想にたいして、「まず心ありき」というのが仏教思想の特徴ではなからうか。

「こころ」と「いのち」の両者は密接なつながりがある。しかも共に間口が広く奥ゆきの深い概念である。「こころ」とは何ぞや、について仏教は「阿頼耶識」説をはじめ、まさに蘊奥をきわめている。現代においても、人間の心の考察は、哲学、心理学、医学のほかにいろいろな面からなされているが、簡単に説明できる問題ではない。

「いのち」の問題も同様である。

深奥な「いのち」の概念を整理し理解する方法として、わたくしは大まかに単純に「見えるいのち」と「見えな

「いのち」に二大別して論じることにしてゐる。

「見えるいのち」とは、人間の身体が生きいきと生きてゐることである。人間が生きてゐること（死んでいない）を、「いのち」がある、という。つまり、生きてゐる身体そのものを「いのち」というのである。人間だけではない。すべての動物・植物の生きてゐる状態が「いのち」なのである。「いのち」あるものが生物なのである。死んでしまえば「いのち」が無くなった、という。

動物が生きてゐることは眼で確かめることができるから、このような「いのち」を「見えるいのち」と名づけた。生物学的、医学的、科学的「いのち」と言つてもよい。

眼に見えるこの科学的な「いのち」については、生物物理学、分子生物学、遺伝子工学などの格段の進歩によつて、その物質的構造がかなり明確になつてきた。しかし、宇宙や地球そのものについてはもちろんのこと、地球上における生物について、なおかつ不明な部分が多い、という。

ところで、この「見えるいのち」をして「いのち」たらしめてゐるようなものが、なにかあるのではないか、宇宙生成のはじまりから根源的なものがあるのではないか、ということを考えることができる。「見えるいのち」を支えている作用（はたらき）のようなものが、この宇宙に満ちみちてゐるのではないか。観念的であつて、はつきりこれだというものは擱めないし、眼で確かめることもできないが、そういうものを表現する適当な言葉として「いのち」の語を用いてもよいのではないか。それをわたくしは「見えないいのち」と言つてゐるのである。

生物が生きてゐるといふ「いのち」の根源に、人間の即物的認識や感覚を超えた「いのち」があると受けとめることによつて、「見えるいのち」がよりよく理解できるのでないか。「見えないいのち」があつてこそ「見えるいのち」が「いのち」たりうるのである、といつてもよい。この「いのち」が、さきの科学的な「いのち」にたいして、

哲学的あるいは宗教的「いのち」である、ということが出来る、たとえば「永遠の生命」という言葉の「生命」がそれであるとみなしてよい。永遠の生命は眼には見えないが、悠久の過去から永遠の未来にいたるまで、無限の時間的空間的拡がりの中に、なにか「いのち」が満ちみちていることを、なにほどこ感受することが出来る。

この「見えないいのち」を開悟開示されたのが釈尊であり、それを論理的に説明したのが「縁起」であると、ということになる。

量的に膨大であり、質的に深奥な縁起思想の理解のしかたは一樣でないが、端的に時間的と空間的の二面に分ければ理解しやすい。人間の日常生活は時間と空間の二次元の世界において営まれてゐる。生死の繰り返し、輪廻転生も時間と空間のパラダイムを設けることによつて理解を容易にすることが出来る。

時間的縁起とは、過去の因縁によつて現在のものながら生起し、現在の因縁によつて将来のものながら生起する、ということである。これを因縁生起という。空間的縁起とは、現に因縁生起して存在しているすべてのものは独立自存しているものではなく、みなつながつてゐる、ということである。これを相依相関相資という。

このことについては、かつて詳しく論じておいたので、ここでは省略するが、要は、時間的にいえば無限の過去から悠久の未来につながる「いのち」、空間的にいえば無限の宇宙へと拡大されてゆく宇宙に満ちみちた「いのち」がいまここに生きてゐる一人ひとりの私の「いのち」なのである。森羅万象はすべて宇宙に満ちみちている同じ「いのち」の現われたものなのである。「いのちは一つ」であり、その「大いなる一つのいのち」の中にすべてのものが存在しているのである。このことを生命の一体観といつてもよい。このようないわば無限大の「いのち」の世界を仏教では「法界」とよび「真如」と名づけている。

浄土教で説く無量寿とは時間的「いのち」、無量光とは空間的「いのち」と受けとめるならば、阿弥陀仏の「い

のち」を頂いて生きている、ということになる。さらにいえば「縁起」を宗教的に表現したのが阿弥陀仏という仏の「いのち」ということになる。阿弥陀仏の「いのち」を頂いてこの世の人間として生まれ、生き、そして阿弥陀仏の極楽浄土に往生する、というのが衆生救済の仏の本願である、と理解することもできる。

「共生」の「生」とは、生きていることだけを指すのではなく、生まれること、生きること、そして往生すること（この世で死ぬこと）である。つまり、生とは生命（いのち）の生である。かくして、死者との共生、仏との共生、という宗教的な「共生」観が展開してゆく。「生死一如」というように「共」が「一如」になる。「いのち」の哲学がここに究まる。

## 六 共生社会（共生人間）

右の論考によつてほぼ理解されるであろうように、仏教はまず神（超越者）を問うのではなく、まず人間そのものを問う。それは人間と人間との共生はもちろんのこと、自然や動物と人間との共生を問うなかで真実の自己の存在を問うことである。このことを基盤にして、人間と超越者（さとれる者、仏陀）との関係が問われてゆく。このような視座の上に共生人間論が展開し、共生社会がめざされてゆくのである。

一般に共生が主張されだしたのは、とくに自然との共生であつた。人間が自然を利用し、自然を開発するということまでは許されるにしても、自然を支配し、自然を征服するという人間の傲慢さを反省せしめられるにいたつたからである。自然の懐に抱かれ、自然の恵みによつて生かされているという謙虚さを失なつてしまつたのである。自然を神と崇める（八百万神）日本古代人の宗教心の中に、自然との共生を説く仏教が移入された。日本人にとつ

ては、自然との共生は生活習慣になっていた。ところが、西欧文明や科学技術の移入によって自然支配の觀念が増長してきたのである。

自然との共生を説く仏教思想の一つとして「仏性」説をあげることができる。大乘の『涅槃經』に説く「一切衆生悉有仏性」は『涅槃經』だけの主張ではなく、大乘仏教を通じての基調になる思想である。衆生はふつう人間と解釈されているが、生きとし生けるもの、ということであり、「いのち」をもつすべてのものごとである。さきに述べた「いのち」の哲学で理解されうるように、人間を含めたすべての自然現象が衆生なのである。すべての衆生に仏性あり、ということは自然に仏性ありということであるから「山川草木（草木国土）悉皆成仏」と主張されるにいたった。自然をぬきにした人間は考えられない。また、人間とは、人と人との間、つまり社会のことであるが、その人間は自然と「いのち」を共にしている存在者なのである。人と人との共生はもちろんのこと、自然と共生する人間、それが共生人間である。その共生人間が構成する社会が共生社会である。

自然科学やその技術の良識ある発展によって、自然との共生の方向づけがなされており、環境保全に成果をあげつつある。豊かさを求める人間の欲望は、地球滅亡の危機にいたるまで自然を破壊してやまないかもしれないが、しかし自然との共生については、人間の良識による環境保全への努力によってある程度希望が持てる。厄介なのは人と人との共生ではなからうか。集団内における人と人との争い、集団と集団の争い、ひいては国内紛争、国家間の戦争など数えあげればきりが無い。いまや地球上の四十数ヶ所に戦争に類する紛争が惹起しているという。

仏教の根本教理といわれている四諦説をみるまでもなく、仏教ははてしない人間の欲望を凝視し、そのコントロールをめざす教えである。我執、我欲にまみれた人間であればこそ、その人間の共生を説いているのが仏教である。五戒を説き、禪定を説き、念仏の信行を説くのは、心の安らぎを得る共生人間をめざし共生社会の実現をめざすが

ためである。淨仏国土成就衆生とはこのことである。成就衆生が菩薩であるから、共生人間が菩薩であり、共生社会が淨土である。共生社会（共生人間）への道が菩薩道であり仏道なのである。仏教の理想社会が共生社会である。

## 七 ホリスティック人間学

十数年前から「ホリスティック医学」という言葉が医学界において用いられるようになった。日本では十年ほど前に「ホリスティック医学協会」が設立されている。アメリカではすでに一九六〇年代にこの考えかたが取り入れられていた、という。

保健医学という医学があるにしても、それはごく一部の分野であつて、そもそも医学は病気についての学問であつて、病因を診察し解明し、治癒の方法を探究する学問である。つまり疾病について究明することからはじまつた学問であつて、健康について考えることの学問ではなかつた、ということになる。

ところが、人間は健康が正常なのであつて、病氣は異常なのである。正常な状態に関心をおかず、異常な状態を研究してきたのが医学である。それが悪いと言っているのではない。病氣を研究して、それを減らしてゆき、平均寿命を延ばしたことは大いに評価してよい。

しかし、科学と医学の進歩の内容は、健康をいかに保持するかということよりか、医療機器の長足の進歩、医療技術の進展、それらによる医師のすぐれた診療治癒能力、医薬品の充実による治癒などが主になっている。しかも、ある種の病氣を持つたままの延命技術が目立つようになってきているのではないか。もちろん、それもこれも要は健康状態になることを目ざしているのであるから、医学の進歩は歓迎すべきであるが、ますます専門化細分化され

てゆく医学を、総合的な方向づけへと見なおして、人間の健康な生活を維持せしめるという原点を重要視すべきだ、ということがホリスティック医学を志向せしめていった。全体的な丸ごとの医学、病氣も診るが人間全体を観る医学、ということである。

日本ホリスティック医学協会会長藤波襄二氏は「ホリスティック医学とはなにか」という論述<sup>15</sup>において、その意義を明確に説明している。「物事は分解してしまつては分からない。丸ごと見なければダメである。ホリスティックメイシンとは丸ごと医学ということである。何が丸ごとなのか。人間丸ごと、即ち体だけでなく、心と精神も、あるいは事によると靈魂ということもあるかもしれない。そういうことも含めて、人間全部、頭から足の先まで診て、人格を持った人間として診断し治癒することである。人間は地球上で他の動物と共に生きている。他の動物と共存共栄しなければならぬ。健康は地球丸ごとで考えなければならぬ。人間に大きな影響を及ぼしている太陽、自然という宇宙全体を視野に入れて、丸ごと考える。宇宙丸ごと、地球丸ごと、人間丸ごとと考えてゆこうというのがホリスティックな考えかたである」(論述から任意に抄出)と述べる。まさにこれが共生なのである。共生こそ宇宙丸ごと、地球丸ごと、人間丸ごとということである。

ホリスティックという語の語源からいっても、丸ごとというのは細分化された医学分野を総合すること、身体全部を一括することというだけではなく、心のはたらき(情感、意志、想念などきわめて個性的なはたらき)を含めた人間全体ということであろう。宇宙や自然との調和の中における有機的な総合体としての人間の健康を考えることである。ホリスティックな、言いかえれば共生の人間観からはじまる「いのち」の医学である。

医学だけの分野ではなく、いまや各学問分野において、学際研究の著しい進展の上に、ホリスティックな研究手法がとられている。では仏教学はどうであろうか。さきに一言したように、仏教学は人間学である、ということは、



ホリステイック人間学であるということになる。ホリステイックに人間を探究することから、真実の人生を解明していったのが釈尊であった。仏教の仏教たる所以は、生・老・病・死の人間を見つめることにより、「いのち」の問題を解決することにある。共生社会のありようはホリステイック人間の探究によつてもたらされる。

## 八 共生と共育

人間が生きてゆくということは、身心ともに育つてゆくことである。共生には共育も含むというのがかねてからのわたくしの主張である。

浄仏国土成就衆生は人間教育からはじまる。ところで、「教育」の用語はあまりにも一般化している。この語は「教授」と「共育」に分けて理解すべきである。知識や技術は教授するのであり、人がらをつくり人間を形成するのが共育である。学校で知識や技術を教授し学習させることを教育と言っているが、教育の基本が人間をつくることにありとすれば共育と言いかえてほしい、というのがわたくしの教育観である。つまり「教育」の語を「共育」に変えるべきだ、ということである。学術の教授と人間の共育との間に深い関わりがあるにしても、教授と共育とを峻別すべきであろう。共育とは、共に育つこと、育たれ育てることである。育てることは育てられることである。現代の「教育」のうけとめかたが、教える育てるという上から下への教育観になっているところに問題がある。

森羅万象の大いなる「いのち」の中で共に生かされ共に生きている、他から生かされることが生かすことであり、他を生かすことが生かされることである、という「共生」の生を育におきかえるならば、生かされることが育てられることになる。共育は上下の関係ではない。共にという横の関係である。老少を問わず人間は育てられ生かされ

ている。育てることによって育てられているのである。共育のありかたが共生社会を実現してゆく。

要は、個人の自律、自立という自主性、主体性を確立した上で、共生人間として生きぬいてゆくということである。相手（他者）あつての自己である。相手のおかげで生きている、相手によって生かされている、というのが自律なのである。宗教的に言えば、み仏によって生かされている、ということになる。その生きざまは、まず自己の厳しい反省と、他者への敬虔な感謝である。このことを具体的にいえば、

- 一、自分は自分以外のすべての人びと（すべてのもの）に支えられて生かされていることを自覚する。
  - 二、すべての人びとの「いのち」、すべてのものを大切にす。
  - 三、お互いに信じ合い愛し合い助け合つてゆく。
  - 四、どのようなとき（苦しいとき、辛いとき）でも将来に希望と喜びをもって生きぬいてゆく。
- ということになる。

共生社会を説き、人間共育を説くのが仏教なのである。

註

- (1) オスワード・シュペングラ、村松正俊訳『西欧の没落』（桜井書店刊）。アーノルド・トインビー、深瀬基寛訳『試練に立つ文明』（社会思想社刊）長谷川松治訳『歴史の研究』（世界の名著61、トインビー）（中央公論社刊）。
- (2) 拙著『仏教を知る』（浄土宗刊）一六六頁、「日本仏教の特徴」を参照。本論考では学問仏教と宗派仏教については省略して論述を進めてゆく。
- (3) 「浄仏国土成就衆生」については、拙論「浄仏国土思想について」（『日本仏教学会年報』第三七号）参照。その社

会的展開については、前掲注(2)の「仏教と教育・福祉」および『引導二十世紀的仏教』(台湾、淨覺仏教研究所刊)四四頁、拙論「二十一世紀を拓く仏教」を参照。

(4) 山口定『共生』の社会的ルーツ」として『京都新聞』(一九九五年九月二五号)に掲載。それぞれの領域をつぎのように分類して紹介している。共生の一般理論を論じたもの、企業の経営戦略・経営理念を論じたもの、環境問題にかかわるもの、福祉関係、国際関係、教育関係、情報と科学関係。

(5) 「俱生」「同生」の収録解説はあるが、「共生」の類語といえるかどうか問題が残る。

(6) 椎尾弁匡(一八七六―一九七二)は日本を代表する近代仏教推進者であり、仏教学者である。とくにその共生会運動は顕著な業績をあげた。『椎尾弁匡選集』十卷(山喜房仏書林刊)のうち、第九卷が『共生講壇』『共生の基調』である。第七卷に「共生の原理および組織」が収録されている。

(7) 「共生」が中国や韓国、さらには日本の古い時代において、どのように用いられているか詳しくは調べていないが、たとえば明治時代の文豪徳富蘆花が『自然と人生』の中で「悠然として相容れ怡然として共生す」と述べているように、椎尾弁匡以前にも用いられているとおもう。しかし、この語のもつ思想内容を内実化し社会化していったのが椎尾弁匡の仏教運動である。

(8) 共生の類似語としての共棲のほか、共存、相互依存、寛容などの用語もあり、SymbiosisのほかLiving together, Harmonious co-existenceなどの英訳語もあるが、それらの考察について、いまは必ずしも必要ないので省く。

(9) 前掲注(6)『椎尾弁匡選集』第九卷八頁。

(10) 同右、三〇九頁。

(11) 同右、七頁。

(12) 同右、五八六頁。

(13) 前掲注(2)第三章(一)「いのち」の哲学および「無量寿仏と無量光仏——縁起の理解をめぐって——」(竹中信常博

士頌寿記念論文集『宗教文化の諸相』、刊行会刊、所収)を参照。

(14) このことについては前掲注(13)の拙著・拙論で詳しく論述しているので参照。

(15) 『LIFE SCIENCE』一九九五年七月号所載。

(16) もともと「ギリシヤ語ホロスにもとづいており、ホーリ(神聖な)、ヒール(癒し)、ヘルス(健康)の語はホロス

を語源としているという(注(15)の藤波襄二氏論文)。ホーリとは俗世間の人間を超えた人知の及ばない領域につな

がるものであるが、言いかえれば、それは宗教の世界であり、人間の情感(心)の世界である、といつてよい。